

DHARMA EYE



法眼

## ご挨拶

## 秋葉玄吾

北アメリカ国際布教総監

北アメリカ国際布教総監部（曹洞宗宗務庁）が、この地で何故日本の曹洞宗宗制を施行しようと努力を傾けてきたのかについて、若干述べます。

曹洞宗は、「仏祖単伝の正法に遵い、只管打坐、即心是仏を承当する」、この恒久的な根本理念に立脚し、宗門人は一仏両祖のみ教を崇拜し、「禅戒一如、修証不二の妙諦を實踐する」宗派であります。この宗門人は僧俗を問わず互いに慈悲親密の心を以て、いつくしみ愛し合い、一仏両祖のみ教えが世界中のより多くの人々へ伝わり、和合社会がもたらされることを念願しています。その道念と信仰に基づき宗制を定め、遵守し、運営をしております。このように曹洞宗の宗憲で述べられております。そのような宗派の基本方針に則り、様々の規則、規程が定められています。日本の約1万5千ヶ寺、僧侶数約2万6千といわれる宗派はそれらの規則、規程により宗団の秩序維持を保っています。曹洞宗宗務庁は、伝道師及び伝道教師規程に規定されていた海外僧侶を、日本の曹洞宗僧侶に適用しているのと同じ規程へ編入する作業を2007年より行ってきました。その規程は「僧侶教師分限規程」という、僧侶の身分に関する規則です。その作業が完了し（いくつかの問題点をいまだ残しているが）、海外僧侶は、曹洞宗宗制上、日本の僧侶と同じ義務と権利を有する平等な身分の僧侶となりました。海外で増加しつつある僧侶を曹洞宗はどう観て、宗制でどう扱うべきなのか、長年の懸案であった大きな問題のひとつは解決したのです。海外で長年の間一仏両祖のみ教を實踐、敷衍することに身をささげてきた海外僧侶を認め、尊重した結果であります。

次は、寺院規程に海外の寺院を登録する問題が横たわっています。これは僧侶一個の身分上に関する事とは違い、各国の法律、寺院運営、寺院の決議方法などの問題が関わってくるため、手続きは簡単にはいかないだろうと思われま

さらに、曹洞宗宗制は多くの規程を備えており、その規程が海外でどこまで適用出来るのか、適用してそれでいいのか、といった懸念と不安が日本、海外の曹洞宗関係者双方に生じてきています。もちろん、一般的にも、ある規則をある人々へ適用するには、その意図、目的、その規則が目指すビジョンなどを十分に説明し、相互の理解に基づいて運用されるものでしょう。また規則・規程は、きつくもゆるくも運用されるべきではなく、集団の常識、良識の判断により、適正に運用されるものであるべきでしょう。ましてや伝統、歴史、国民性、習慣、文化、言語などの違う国の曹洞禅実践者へ、日本が長い時間をかけて築いてきた曹洞宗宗制を適用することは、互いにかなり無理を強いることになるでしょう。解決への道は、当事者同士が話し合い、相互理解をすることがまず第一歩であります。ここでは、規則、規程について細かく論ずることはせず、北アメリカの禅について、まず俯瞰いたします。

1960年、山田靈林老師（後の永平寺75世貫首）が北米開教総監として禅宗寺に着任されました。赴任後、しばらくして「禅仏教昂揚研修所」を設立されました。加藤和光師が講師として補佐し、坐禅会を定期的実施し、若い開教師であった前角博雄師は熱心に参禅指導しました。桑港寺では、1959年に開教師として赴任してきた鈴木俊隆師がロサンゼルスに呼応し、坐禅会を実施しました。総監部は、日本の若い志のある僧侶を「研修所」へ招聘、それに応じて片桐大忍師などが渡米してきました。後に、知野弘文師などがサンフランシスコへやってきました。北アメリカにおける只管打坐、修証一如の曹洞禅揺籃期のはじまりであります。以来、半世紀を経た現在、北アメリカには200以上といわれる曹洞系禅センターが、アメリカ人の僧侶・メンバーにより設立、運営されるまでに発展してきました。海外布教一世と名付けられるべき上記の諸老師方が、正伝の仏法、禅の仏道を此の地に伝えようと工夫をされた弄精魂はもとより、その諸老師の二世、三世のお弟子さんがその師の教を真摯に継承し、創意工夫、試行錯誤を重ね、この地に曹洞禅を根付かせ、定着させようと尽力しました。彼らの長年にわたる日ごろの精進により、各地にサンガが形成されたという成果をみたのであります。それは、坐禅、作務の生活にいそしむメン

パー、一仏両祖のみ教えに共鳴、尊重する人々のサポートにより支えられたおかげでもあります。さらに、日本の曹洞宗との交流、その支援協力もあって、北アメリカの曹洞禅は豊かに多彩な展開をしたといえます。そして現在、日本の宗門宗師の弟子となり、日本の僧堂で修行を積んだアメリカ人の僧侶が、この地での曹洞禅の布教活動に加わりサンガを築いています。さらに、日本生まれの宗侶がアメリカの地に渡り、布教活動に邁進しております。布教活動を目的に北アメリカに渡る志のある日本の宗門僧侶は絶えないことだろうと思います。

このような状況を考慮すると、道元・瑩山両祖下の様々に流れた法系に連なる僧侶が、この北アメリカの地に続々と産まれ、多くのサンガを形成していくことは確実であります。まさに、北アメリカの曹洞禅は中国唐期のそれと同じく、純禅、揺籃期の真っ只中に入ったと言えます。北アメリカには、この地の歴史、気候、風土、社会習慣、国民性、法律、経済に適した北アメリカ人のための曹洞禅、そのサンガ群が創設されることでしょう。そこで最も大切なことは、一仏両祖のみ教え、法が正しく伝えられ、「仏道」が正しく実践されることであります。禅学大辞典（駒沢大学編纂）の禅宗法系譜は、釈迦牟尼仏より伝わった法系を明詳に記録しています。ある流れは止まり、ある法流は綿々と相承されたい流れとなったり、細ったりと諸相を示しています。そして、道元・瑩山両祖の法系の大河がこのアメリカの地に脈々と流れ至ったのであります。（1967年以降、弟子丸老師の影響により、ヨーロッパにも同じ法系の大河が流れた）この大河の温かい法の流れに身を委ね、自己確立を果たした禅の人を、どこの国の人であっても曹洞禅僧侶と呼びます。

さて、僧侶とは何か。頭髪を剃る、お経を学び誦す人、衣を着る人、袈裟を被ける人、法を説く人、菩薩の道を歩む人であり、禅の僧侶とは何か。祖録公案を学び参究する人、作務をする人、坐禅をする人、一衣一鉢、三物を保持する人、修行をする人であり、曹洞禅の僧侶とは何か。前二者に加え、只管打坐、修証一如、禅戒一如を奉ずる人、十六条戒を保つ人であり、どこの国の人であっても、この基本に立つ人もまた曹洞禅の僧侶と呼びます。この僧侶を核にサンガが形成され、同時にサンガの僧侶が守るべき規則が必要となり制定されます。禅のサンガではこの規則を清規と言ひ、清規は禅のサンガの形体を護ります。唐代の百丈の古清規（大小乗の戒律を参照して禅門独自の規則を定めたもの。現存しない）以後、宋代の「禅苑清規」を模範としていくつものそれが成立しています。日本では「永平道元禅師清規」

「瑩山和尚清規」をはじめとして、「小叢林略清規」などいくつ編まれ、各寺院の規範となっています。清規は祖師の家風、その国の国民性、時代相が加味されて制定されます。

北アメリカの曹洞禅のサンガの清規は、僧侶のみならずメンバーの人々も考慮に入れ、より多くの人々が抛ることの出来る、より大乘的な規範を僧俗合議により制定する方向へ進んでいます。それは、現実社会へ開かれた清規と呼ぶべきものでしょうか。もしくは、一般社会へ対するサンガのゲートを大きく開くことが可能な清規と言うべきものでしょうか。北アメリカのこのような特徴を持つ曹洞禅の“禅センター”と呼ばれるサンガ（寺院）は、各地に大小合わせて200以上も存在し、僧侶は350人以上活動をしています。これらのサンガ・僧侶が同じ法系の大河に浮かぶ禅のグループとして連帯感を結び、ひとつの大きな船（包括団体）を作り上げる機運が醸成されるのは歴史の必然であります。その船が北アメリカでは、ソートーゼン・ブディスト・アソシエーション（SZBA）である。現在、北アメリカの曹洞禅の実践者はその船をデッサンし竜骨を固定しようと努力を傾けています。多忙にもかかわらず、議論を重ね、船のデッサン、竜骨のサイズを決めようとしています。連絡を取り合い、図面を描き続けています。それは、現代のノアの箱船にならなくてはいいけません。統一性と多様性がせめぎ合うアメリカ社会は、ダイナミックな創造性を内包しています。と同時に、多くの問題も抱えています。（貧富の差、家族・教育の問題、暴力、犯罪、病気、メディア・バイオレンス、人種と民族など多様な問題である）このアメリカ社会の多くの人々が、このアメリカ曹洞禅が築いた「21世紀のノアの箱船」に乗って大乘の曹洞禅を学び、互いに助け合って実践し、安心立命の自己確立をします。その船の船側板を張り、帆を揚げ走り出す努力をすることは、一仏両祖の法系の大河に浮かぶ禅者の大慈悲心であります。この北アメリカの曹洞禅のノアの箱船が完成するのは10年後か、20年後か。

日本の曹洞宗の諸規程はいわば「咸臨丸」です。咸臨丸とは150年前、日米修好通商条約批准のために親善使節のサムライ達を乗せてアメリカに渡った船です。その条約は開国に目覚めたばかりの日本に不利なものでした。関税自主権が日本になかったのです。それはさておき、北アメリカの曹洞禅の僧侶、サンガ（寺院）は、しばらくの間この咸臨丸に乗船し、一仏両祖の法系の大河に浮かぶことが次善の道だろうと思います。みなさんは咸臨丸に乗船し、船の操縦に参加し、航海士にだってなっているのではないかと。日本の曹洞宗が海外僧侶を咸臨丸に乗せ、皆さんを不利な、窮屈な規則で縛り、

コントロールをし、辛い思いをさせるとは到底思えません。また、日本の曹洞宗宗制は真珠湾を急襲したゼロ戦を積んだ航空母艦でもありません。北アメリカの曹洞禅を破壊するために、北アメリカへ渡ろうとしているものとは到底思えません。

曹洞宗宗制は一仏両祖のみ教えが世界に広く敷衍され、その教えにより、より多くの人が安穩、安楽の境地へ立ち帰ることを念願し定められました。そのみ教えを奉じ、実践する人々同士は平等であり、その全体が安定した秩序を保つために規則は運用されるものです。しかし、もちろん規則とは制定した意図を逸脱して、規則自体がその枠内に在る人を縛ってしまうという危険性を有しています。その点は、実際に運用する担当者は充分注意しなくてはならないでしょう。しかし、運用者も曹洞禅の僧侶です。その良識と慈悲心を信じたいと思います。

いずれにしろ、北アメリカの曹洞禅の人々が造船した「21世紀のノアの箱船」が、北アメリカの僧侶やサンガの人々を乗せて、曹洞の大河に浮かび流れる状態に至ったなら、咸臨丸の乗客はそちらに乗り移ることは可能なのです。そして、ともに世界の曹洞禅の大海へ乗り出し、他の曹洞禅の船々と信号を交わし合い、時に自由に船々を行きかい乗り、他の船の羅針盤の見方を習ったり、船の整頓の仕方や操縦法を学んだりし、ひとつの大きな宗教的理念へ向かって進むことを、日本の曹洞宗は念願しているのです。

## 洞光山直証庵 10周年記念法要 喜び、感謝、そして意義に満ちた多大なる成功

是松慧海

直証庵(オーストラリア・メルボルン)

2009年4月26日、オーストラリア指圧大学において直証庵10周年記念法要が成功裡に厳修されました。150名を超える人々が参列し、この記念すべき行事を楽しみました。

この記念行事を無事終えることができたのは、直証庵のメンバーたちの10年にわたる修行と奉仕の成果でありました。また、それは他の仏教団体や組織からの来賓、僧侶、直証庵のメンバーや友人など多くの人々の(金銭的そして非金銭的)援助、支持、寄与があったからこそ可能となりました。

10周年記念行事を実現するために、特別の寮舎(グループ)が作られました。80名のメンバーが、行事が正式に始まる前日から2日間の日程で参加してくれました。夕方、会場の支度が出来上がったあと晩参(僧侶や来賓の方たちとのオリエンテーション会議)が禅堂で開かれました。来賓を含むすべての参加者が名前を呼ばれて紹介され、それぞれの寮舎での役割が割り当てられました。それに続いて、プレストンにある中国料理レストラン・ゴールドリーフで来賓の方々のための歓迎夕食会がおこなわれました。

私たちは2名のすばらしいチベット僧侶、トラレー・リンポチェ師とフック・タン師、そして地元の仏教団体の代表者の方々の列席を賜りました。彼らの参加と存在は私たちの仏教とコミュニティに対する意識と経験の幅を広げ、将来における直証庵にとっての新しい局面を開いてくれました。

幸いにも、私たちは12名の来賓と僧侶を日本から迎えることができました。3名の曹洞宗代表者として、曹洞宗宗務庁から宮下陽祐教化部長、山下昭文課長、サンフランシスコの曹洞宗国際センターから南原一貴師が出席して下さいました。その他、日本から来られた5名の住職(岡山の洞松寺、中興寺、長泉寺、宮城の通大寺、札幌の正信寺)を含む9名です。この5名のほとんどは故檜崎一光老師(直証庵御開山)を師と仰ぐ強いつながりと、ゆるぎない感謝の気持ちから10周年記念法要に遠路はるばる参列して下さいました。宮下教化部長からは、今回の訪問に先立って直証庵に山号をつけるようにというお話がありました。これは驚きでもあり、また名誉なことでもありました。それは、曹洞宗が直証庵を正当な曹洞宗寺院として承認する心積もりであることを意味しているからでした。中国や日本の仏教寺院は伝統的に山号を持っています。私の先輩である斎藤芳寛師(山口県岩国市)に電話で相談し、直証庵の山号として「洞光山」を選んで下さいました。「洞」は曹洞宗の洞から取ったもので、文字の意味は「洞穴」であります。「光」は私の師匠の僧名である「一光」から取りました。ある意味、この「洞光山」という新しい山号は、人の場合で言えば姓にあたり直証庵は名にあたります。この名前は今後、直証庵の法系がきちんと継続し、私たちの法系がますます繁栄していくことを促進してくれるでしょう。

直証庵は独自の建物や寺院がないので、私はメンバーとその活動そのものが「寺」だといつも考えてきました。だから、メンバーたちには修行に励むようにとずっと言い続けてきました。山号を持つということは今まで考えたことがありませ

んでした。「山」という語には深い意味があります。禅の伝統においては、それ自体が公案なのであります。私は宮下教化部長のご親切と聡明さに心から感謝します。

午前のプログラムの一部として、トラレー・キャボン・リンポチェ師が「チベット仏教と禅」をテーマとする公開講演をおこないました。多数の良い質問が出され、師の特別な教えと応答は高く賞賛されました。記念行事はすべての人にとって大変楽しいものでありました。鈴木聖道老師（岡山県洞松寺）と慧海和尚、2人の導師による2つの法要（釈尊報恩法要と御開山報恩法要）の後、昼食会が開かれました。清子さんの指導による典座寮は、この上なく美味しい美しく盛りられた食べ物を全行事の間提供してくれました。午後は、直証庵のメンバーと友人たちが余興においてそれぞれのユニークな才能を発揮してくれました。子供たちや家族は、テック・フック・タン師が導師を務めた釈尊の降誕会法要に参加しました。宮下教化部長は直証庵の10周年記念法要の導師を務められ、すべての人が焼香をしました。以上の正式な行事の後、50名以上の人々が記念晩餐会を堪能しました。

直証庵の10周年と私自身にさらなる意義をもたらしたその他の出来事についてもここで言及しておきます。直証庵と直証庵のキャンベラ分院との間で初めて正式な調印が交わされたこと。清子テラーが『ブッダの生涯』という翻訳プロジェクトを完了し、発刊されたばかりのその本をメンバーやコミュニティの友人たちに献呈したこと。ドロマナに新しい禅堂がオープンしたこと。直証庵の就任メンバーの一人であるポール仙龍と直証庵のニュースレター『明珠』の最初の編集者兼創刊者であるジョージア・玄明・ニコルスの2人が得度をしたこと。

すべての人におめでとう！一言で言うなら、直証庵のメンバーたちは私たちが10歳のサンガであり、この記念法要において自分たちがおこなうことができる事を十分に表現しました。喜びと与え合いの精神がその場に広がりました。次の10年の間に直証庵が成人したサンガになる時、どのようなものになっているかを見るのが待ち遠しいです。

最後に、このたびの記念法要行事に温かい援助を寄せていただき、また参加していただいた来賓や僧侶の方々、メンバーや友人たちに心から感謝の意を表します。この記念法要のもたらす功德が世界に広がり、衆生と共に仏道を成ずることが出来ますように。

合掌

鳳山山居の偈

萬象之中 独露身

更に何処にか根塵を着けん

首を回らし独り枯藤に倚って立てば

人山を見、山人を見る

一 聖護寺開山 大智禪師 一

## 瑞世拝登一法のつながりを祝う

ナカオ恵玉

禪センター・オブ・ロサンゼルス(カリフォルニア州ロサンゼルス)

2008年12月18、19日、私は日本の曹洞宗の両大本山である永平寺と總持寺で瑞世拝登おこないました。この瑞世拝登の目的は、日本の曹洞宗の開祖にして永平寺(1244年建立 福井県)の御開山である永平道元禪師、そして總持寺(1324年建立 元の總持寺は焼失してしまったため1907年に横浜郊外に移転再建された)の御開山である瑩山紹瑾禪師への敬意を表するためであります。

瑞世拝登の儀式はあまりにも綿密であるために、その根底にある重要なことを曖昧にしまいがちです。それは日本語の「因縁」という言葉で表すのが一番ふさわしいかもしれません。因縁というのは、すべての事象は間接的・直接的原因によって起こるという概念であります。私はそのことを簡潔に「カルマの関係性」と表現します。それは常に私たちの人生を支えるように働いている、多くの複雑な目に見える関係、また目に見えない関係のことであります。今回、私を瑞世へと導いたすべてのこと、そして前角博雄老師が西洋へやってきて法の種子を植えるという困難かつ尊い活動をされたこと、さらにそこから花開いた(生じた)すべてのことがつながって、あたかもひとつのキラキラと輝く蜘蛛の巣になっているのが突然見えたようでした。

瑞世拝登は、僧侶が嗣法を受けた後におこなわれるもので、まず開山堂で焼香することから始まる、いくつかの儀式によるものです。伝統的に、永平寺と總持寺の開山堂は限られた僧侶しか入ることができない聖域とされていますが、瑞世師は特別に入ることが許されています。そのほかの儀式としては、仏殿と法堂において朝課の導師をつとめること、また禪師様からの請状授与式と導師の法具(仏子、如意)を授かる

時の見事な儀式などがあります。そして、瑞世師のために特別に調理された朝食（海草で作られた見事な花が添えられた素晴らしいお膳）で締めくくられます。

前角老師の最初の法嗣として、グラスマン徹玄師は瑞世をおこなった最初のアメリカ人のひとりとなりました。日本の曹洞宗は、西洋で修行した指導者たちをどのように組織の中に組み入れていくかという難題に、長い間直面してきました。一時は、西洋の僧侶たちは日本での1ヶ月間の特別接心を終えた後、「伝道師拝登」（瑞世拝登に類似したものであるが、両大本山の開山堂でお拝と焼香をすることができない）をすることが許されていました。前角老師の同僚でもあった秋葉玄吾北アメリカ国際布教総監は、15年以上にわたって、西洋で修行した指導者たちが瑞世拝登をおこなうことができるようにと、一貫した努力を続けてきました。

この10年間、秋葉総監は私に瑞世拝登をするようにと言いつけてきました。去年の夏に秋葉総監が私のところを再び訪ねてきて、1ヶ月の特別接心の条件がなく、また（伝道師）拝登ではなく正式な瑞世拝登をおこなうことができる数人の西洋で修行した指導者がいるとの説明を聞き、私は秋葉総監の親切に感謝し、日本に行くことに同意しました。しかし、その道のりは平坦なものではありませんでした。ロサンゼルス禅センターでの忙しいスケジュールを割いてまで、日本に行くことを決心するために10年という時間がかかったというだけでなく、私の師僧であるグラスマン徹玄師が曹洞宗から離脱し還俗してしまったからです。グラスマン師は自分が還俗することにより起こる混乱を十分予想していましたが、私が瑞世拝登をおこなうにあたってはいつもそれを応援してくれました。グラスマン師が正式に曹洞宗から離脱することに伴って、私の瑞世拝登の書類に誰が署名するのかという問題も処理される必要がありました。そこで、前角老師の弟であり、東京の桐ヶ谷寺の住職である黒田純夫師が引き受けて下さり、私の師匠になってくれました。もちろん、グラスマン師も喜んでくれました。こうして、思いがけず新しい師を得ることができました。それは喜ばしいカルマ的な出来事であり、また因縁の複雑さがさらに形となって現われてきたことでもありました。

12月18日に永平寺、19日に總持寺で、レイトン砥山師（エンシェントドラゴン禅ゲート）、ラクラク清城師（観音堂）と一緒に瑞世拝登をおこないました。私たちの案内人であり、また有能で落ち着いた館寺規弘師が両大本山の親切な修行僧たちと共に私たちの世話をしてくれました。永平寺

では、五世義雲禪師が植えた樹齢500年のスギの木、例年になく暖かい12月の気候が私たちを出迎えてくれました。

それぞれの僧堂には、細かい点で独自の家風があります。前角老師は總持寺で修行したので、私が一番慣れ親しんでいるのはそちらのほうの法式作法です。永平寺では、木蘭のお袈裟をつけ、上側の角を畳んで折り込み、払子を使用しましたが、總持寺では赤いお袈裟をつけて、上側の角を左腕にかけ、如意（漆塗りの棒先に蓮の花を象ったものがあり、それはお釈迦様の顔を表現したもの）を使用しました。永平寺では右に曲がりましたが、總持寺では左に曲がり、また永平寺では香で清めましたが、總持寺では水で清める、などの違いがあります。どちらのお寺でも赤いスリッパを履きましたが、足の小さい私にさえ小さすぎて、總持寺の各お堂につながる通路を早足で歩いて（時には走って）通り、永平寺で何百段もの急な階段を上がって各お堂に向かう時に、しばしば脱げてしまいました。覚え込まなければならないことは山ほどありましたが、私たちは最善を尽くし、あらゆる間違いを乗り越えてやり続け、伝統のもつ神聖さの中に深く陥りました。

永平寺では、私たちは道元禪師を祀っている場所に登壇しました。道元禪師の像は奥深くに置かれてはいましたが、その存在を感じる事ができました。瑩山禪師の祀られている場所も高い壇上にあり、5人の弟子の像と一緒に安置されていました。私たちは、注意深くならざるを得ないほど滑りやすい床の上で、すべての祖師方にお拝をしました。私にとってもっとも感動した儀式のひとつは、両大本山の禪師様に相見できたことです。禪師様は私たち一人一人の請状を読み上げてくださり、私たちは前に進み出てそれを受け取りました。それらは、すべて指導された作法でおこなわれました。それから、私たちは特別なお茶（白湯と割られていない割り箸の先に一切れの梅干がはさまれた）が出されました。白湯の中で三度梅干をかきまわし、梅干を食べ、それからその白湯を飲みました。それから、お祝いのお菓子が出され、私たちはその上に禪師様からいただいた請状を置き、続いて永平寺では払子、總持寺では如意がわたされました。そうして、ようやく導師をする準備が整いました。

永平寺では、故鈴木俊隆老師の御子息である鈴木包一老師が私たちに祝辞を述べるためにやってきて下さいました。ロサンゼルス禅宗寺に長い間居られ、また私の古い友人でもある黒柳博仁師が、私たちの案内をするために長野のお寺からやってきてくれました。しかし、私にとって一番強く因縁を感じた瞬間は、總持寺で禪師様の居られる場所へ向かう途

中で角を曲がる時に訪れました。ある僧侶の横を通り過ぎたのですが、彼の目は輝いていて美しい笑顔をしていました。そして、突然それが前角老師だと思ってしまい、私はすっかりうろたえ、自分の身体が彼の方に向きを変えるのを感じました。そして、まさに声をかけようとした時、その姿は消えてしまいました。

最近、禅センター・オブ・ロサンゼルス（ZCLA）で朝課の後、庭で仕事をしていました。長靴を履いてガーデニング用のゴミ箱のほうから歩いて来ていると、独参のための部屋を改築していたビル・養心・ジョーダンに出くわしました。彼の顔は青ざめ、「恵玉、あなたを見たら、一瞬前角老師が自分の方に歩いてくるのかと思ったよ」と彼は言いました。「そうね、私は總持寺で前角老師を見たわ」と私は答えました。

日本から帰ってきてから、私は秋葉総監にお礼を述べるために禅宗寺に行き、自分の経験を話しました。秋葉総監は、私の面倒を見るという前角老師との約束が果たされたことで大変安心したようでした。私は秋葉総監に大変な苦勞をかけたことを謝りました。そして、私の後継者たちの誰かがいつか瑞世拝登をすることになるかどうか、それは時が示してくれることでしょうか。どのようなことになろうとも、こうしたカルマによる密接な関係はいろいろな形で現われてくるものです。因縁?これほどにも多くのことが私たちのために作用している、それをどうして覆い隠せるのでしょうか？

（この文章はZCLAの機関誌『ウォーター・ウィール』2009年5・6月号に掲載されたものです）

## 瑞世を終えて

### キンスト道養

オーシャンゲート禅センター(カリフォルニア州サンタクルーズ)

2008年12月、カツ永順師(グリーンガルチファーム禅センター)、カバルガ常照師(チャベルヒル禅センター)、スタッキー妙眼師(サンフランシスコ禅センター)、そして私の4名は曹洞宗の兩大本山である永平寺と總持寺において、12月18日、19日の瑞世拝登の儀式をおこなうために日本へと旅立ちました。私たち曹洞宗の偉大なる師であり、また開祖である永平道元禅師、そして瑩山紹瑾禅師に敬意と感

謝の意を表し、さらにその崇高な2つの修行道場で導師を勤めさせていただく機会を与えられたことは、大変名誉なことでありました。伊藤祐司師が私たちに同行し、この旅行を通して大変見事なそして忍耐強い指導とお世話をしてくれました。

私たちは、まず總持寺で瑞世拝登をおこない、次いで永平寺へと向かいました。それぞれの寺院において、まず受付を済ませ、到着茶礼を受け、儀式の進退作法についての指導、美しく料理された夕食をいただきました。總持寺での最初の朝、法堂に入り、水で手を清め、急な階段を登っている時、私たちが修行の途中に感じるひとつひとつの心遣いと寛大さ、そして法を伝えるために献身してきた何代にもわたる祖師たちのことを思い出しました。永平寺においては、道元禅師が祀られている壇上に近づいていく時、暖かい手から暖かい手へと教えを手渡してきた人たちの存在、特に私の師僧であるワイツマン宗純師の存在を感じました。心からの感謝と報恩の気持ちを込めて、御開山様やその法系に続く僧侶に礼拝することは深く感動的な経験でありました。

道元禅師と瑩山禅師に焼香礼拝した後、簡素だが美しい儀式によって私たちは正式に請状をいただきました。私たちの名前が読み上げられるのを聞き、請状をいただいたことで、自分が伝統の根源とつながっているという感覚がいつそう強められました。お茶をいただき、永平寺では弘子、總持寺では如意を受け取り、私たち4人のグループで朝課の導師を務めました。赤いスリッパを履いたり脱いだり、また僧侶たちの読経に合わせてお経を読みながら、導師を務めました。そのお経は自分の名前のようになじみのあるお経もあれば、また特に回向の部分のように、注意を要するようなあまりなじみのないものもありました。

心遣いと寛大さは今回の旅のすべての局面ではっきりと現れていました。進退作法に関して私たちが受けた指導、それぞれのお寺の特別な場面で受けた配慮、多くの細かなことに気を配ってくれ長い通路や古い階段を誘導してくれた僧侶たちの生き生きとした様子、美味しい食事、それらすべてがお寺での修行が培っている活力を表していました。毎晩、私たち3人の女性は宿泊所の机を囲んで集まり、自分たちの修行や師匠から受けたすべてのものを思い浮かべながら、静かに瑞世拝登の進退の復習をおこないました。私は彼女たちとは長年にわたっての知り合いでもあり、共に修行し教えを受けてきたので、このように彼女たちと一緒に過ごせたことは大きな喜びでした。忘れてはならない事がたくさんあり、指摘されたことのすべてを覚えておこうと全力を尽くしましたが、

うっかり忘れてしまい、間違えることも何度かありました。誰もが私たちにとても親切で辛抱強く接してくれました。ただひたすら儀式に集中し、伝統の中に自らを没頭させることは喜びでありました。私たちは心安らぐようなお茶と美しく美味しい朝食をいただきました。永平寺においては、大田大穰監院老師と一緒にお茶を頂戴することができ、そして大田老師が鈴木俊隆老師との思い出話しをして下さり、それを聞いて大変うれしくなりました。また、大田老師はご自分のアメリカ訪問をした時のお話をしてくださいました。私は、特に大田老師がおこなった平和行進のお話しと私たちに一冊ずつくださった『ランタンとつる』という絵本が思い出になりました。

瑞世拝登の後、カツ永順師と私は京都を訪れ、寺院や庭園の美しさを堪能しました。私は曹洞宗の布教に携わっていくという励ましと力を得て、自分のサンガに戻ってきました。私は今、日々の絶え間ない修行を通して祖師たちへの恩に報いていきなさい、という道元禅師の教えをあらためて考えています。今回の瑞世拝登が実現するにあたり関わってくださったすべての人々、特に西洋で修行した指導者たちのために努力を払っておられる秋葉玄吾北アメリカ国際布教総監に深く感謝致します。

## 正法眼蔵坐禅箴 自由訳

藤田一照

葉山磨博会主宰

南嶽が言った。「汝若に坐<sup>す</sup>仏<sup>せ</sup>ば即ち是れ殺<sup>せ</sup>仏なり」（普通なら「汝もし坐<sup>す</sup>仏<sup>せ</sup>ば即ち是れ殺<sup>せ</sup>仏なり」と読むがここではそう読むべきではない）。つまり、おまえは坐禅して坐<sup>す</sup>仏<sup>せ</sup>そのものになりきっているのだから、いまさらあらためて仏になるということもない。仏の入る余地がない。仏は必要ない。仏不在でよい。だからそれを<殺<sup>せ</sup>仏>と言うのだ。（臨済の言った「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し…殺<sup>せ</sup>仏殺<sup>せ</sup>祖」においては殺とは仏や祖に対する執着を打破することを意味したが、ここでは道元は坐<sup>す</sup>仏という形での殺<sup>せ</sup>仏のありかたを提示する）

これまで坐<sup>す</sup>仏ということについていろいろ論じてきたが、さらに一歩すすめて坐<sup>す</sup>仏を参究してみると、坐<sup>す</sup>仏には殺<sup>せ</sup>仏という功德がある。坐<sup>す</sup>仏がまさしく坐<sup>す</sup>仏になっているまさにそ

のときには、まちががなく殺<sup>せ</sup>仏という仏（仏を殺し切った仏）である。殺<sup>せ</sup>仏という仏の具体的な姿かたちをしらべてみようとするれば、それはかならず「坐<sup>す</sup>仏」でなければならない。<殺>という言葉は凡夫の世界で用いられる言葉（たとえば人のいのちを奪うという意味の「人殺し」と文字の上では同じであるけれども、意味の上においても同じであると思っはならない。（『正法眼蔵』の註として最も古い『御抄』には「坐禅の親切なる道理が殺<sup>せ</sup>仏と云はるるなり」とある）また坐<sup>す</sup>仏が殺<sup>せ</sup>仏でもあるということは、有<sup>いかなる</sup> 什<sup>な</sup> 麼<sup>いかなる</sup>形段（普通なら「いかなる形段か有らん」と疑問文として読まれるが、ここでは殺<sup>せ</sup>仏には「決まった形段がないこと、無限・無相の坐禅の当体のこと」であるから「什麼（＝限定を超えたもの）という形段が有る」と読まれるべきだろう）として参究しなければならぬ。坐<sup>す</sup>仏はある特定の固定的な姿（形段）への固着ではないからだ。坐<sup>す</sup>仏の功德のなかには殺<sup>せ</sup>仏という功德があることをよくよくこころにとどめて、殺人・未殺人ということ（坐禅に人の入り込む余地が残っているかいなか）についても参学すべきである。坐禅はただ坐禅であって仏とか人とかが入り込む余地がないのだから。ここで言う人とは個人的な自己意識（吾我）のことである。

（南嶽が言う）「若に坐<sup>す</sup>相を執<sup>せ</sup>せば、其の理に達するにあらず（普通なら「若し坐相に執<sup>せ</sup>すれば其の理に達せず」と読んで、坐相に執着することを戒めるような意味に解するがここではそうではない）。執坐相つまり、坐相を正して坐禅をしているのなら、それでもう充分であり、それ以外に『其の理』にあらためて達するというようなことは問題にならない。執坐相はどこか外にある到着点にいつか達することをめざしておこなわれるような営みではないからだ。」（ここでの<執>は執着の執ではなく、殺とおなじく「親切（そのものと一つになって余物のないこと）」の意）

ここでいうところの「執坐相」とは坐相を無所得無所悟で修行し（それを「捨」という）、実際に身体をもって正確精密に修行する（それを「觸<sup>そく</sup>」という）ことである。ここには、坐<sup>す</sup>仏するには正しい坐相をどこまでも徹底して坐禅するしかないという道理<sup>すじみち</sup>がある。坐相を正しくしないで坐禅することはありえないのだから、坐相を正すということがたとえ透明な玉のように純粋無雑に見事にできたとしても、到達点に達するということがない営みでなければならない。このような方向性をもった修行のことを脱落身心という。いまだかつて正しい坐禅をしたことのない者には、南嶽と馬祖がとりかわしたような、坐禅を見事に言い表した言葉を言うことは不可能である。打坐するとき、打坐する人、打坐<sup>す</sup>仏、学坐

仏にはそういう表現が生まれてくる。凡夫がふつうにあぐらをかいて坐っているのが打坐仏だというのではない。

人（凡夫）の坐った形姿がたまたま坐仏・仏坐に似通っていることはあってもこの両者はまったく違うものだ。結跏趺坐の坐禅には人が仏に作ること（人作仏）があり、仏に作る人（作仏人）ということがあるからだ。しかし、仏に作る人があるといっても、すべての人が坐禅とは別個に、はじめから作仏しているというわけではない。坐禅抜きに作仏ということはないからだ。また、坐仏している仏になっている以上、それはもうすでに一切人ではない。一切仏はどこまでも一切仏であって、決して一切人ではないからだ。人（凡夫）はそのままで決して仏ではないし、仏は決して人ではない。このことは坐仏に関しても同様である。仏と凡夫の区別は決して混同してはならない（不可分にして不可同）。南嶽と馬祖という子弟が師もすぐれ弟子も立派で同じ力量を持っていた（師勝資強）ことはこのようである。坐仏が作仏であることを「図作仏」という言葉で見事に証明しているのは江西馬祖である（「坐禅かならず作物の図なり」）。また、作仏のためには坐仏でなければならないことを「磨埴作鏡」によって示したのは南嶽であった（「古鏡も明鏡も磨埴より作鏡をうるなるべし」）。つまり馬祖は作仏を主とし、南嶽は坐仏を主としてそれぞれ示し、どちらも作仏と坐仏が表裏一体である真の坐禅のありようを説きぬいている。南嶽の指導していた修行者の集まりにおいてはこのような工夫参究がなされていたのだ。また、薬山の指導していた修行者の集まりにおいては、先に述べたような「思量箇不思量底」云々という表現があった。このことからよくよく知らなければならない。どの仏もどの祖師がたも大切な契機（要機）とされたのは、あくまでも坐仏であるということ。だから坐禅が「初心晩学の要機」であるというような理解はまったく間違っているのだ。すでに仏とか祖であると言われる以上、かれらはかならず坐禅という大切な契機を使用している。いまだ仏祖たり得ていない者はそのことをいまだ夢にも見たことがない。仏法がインドや中国に伝わるといことは必ず坐仏が伝わるといことなのだ。それこそが仏法のもっとも肝心要のポイントだからだ。仏法が伝わらなかつたら坐禅は伝わらない。仏祖から仏祖へと代々親しく伝えられて受け継がれてきたのは、このような坐禅の根本的な趣旨だけなのである。この根本的な趣旨をまだ純粋に伝えていない者は仏祖ではない。この坐禅という一つの法をはっきりと明らかにしていないならば、それ以外のすべての法もまた明らかにしていないし、すべての行も明らかになっていない。さまざま法を明らかにしていない者は「明眼（聡明でものごとに精

通した人）」と呼ぶことはできないし、「得道(道を得た人)」でもない。どうしてそのような者が古今を通じての仏祖に等しいと言えるだろうか。であるから、仏祖はかならず坐禅を単伝（先人から坐禅をひとえに純粋に混じりけなく伝えられ、またそれを次に伝えること）するのだということをはっきりと決定しなければならない。

仏祖の光明に照らされるということはこの坐禅を功夫参究することである。なぜなら仏の教えとその恩恵によって初めて坐禅を正しく行ずることができるからだ。それなのに愚かな連中は、仏の光明ということをして日月の光のようなもの、あるいは珠玉の輝きか炎の光のようなものだろうと思っている。しかし、そのような客観的対象物である日や月の光や輝きはたかだか「六道に輪廻する業のすがた」でしかないのであって、決して仏の光明に比べられるようなものではないのだ。仏の光明というのは、仏法の真実を端的に言い当てているような一句を聞いて信受し（受持聴聞）、そのような一法をしっかりと保ち護って（保任護持）、坐禅を単伝することだ。光明に照らされるのでなければそのような保任も信受もない。

## 国際ニュース

### 北アメリカ曹洞宗日系寺院国際布教師研修会

場所：カリフォルニア州サンフランシスコ 桑港寺

日程：2009年9月9、10日

### 北アメリカ曹洞禅連絡会議およびワークショップ

場所：カリフォルニア州サンフランシスコ 桑港寺

日程：2009年10月2-4日

### 曹洞宗南アメリカ国際布教総監部ならびに両大本山南米別院佛心寺創立50周年記念慶讃法会

場所：ブラジル合衆国サンパウロ

両大本山南米別院佛心寺

日程：2009年11月13-15日

### 曹洞宗宗立専門僧堂

カリフォルニア州陽光寺において、三ヶ月の安居が開催されます。日本国外で曹洞宗宗立専門僧堂が開設されるのは、今回が三回目です。

日程：2009年12月15日開単

2010年3月10日閉単

今村源宗ヨーロッパ国際布教総監が2009年10月31日にて辞任され、フォルザーニ慈相師が2009年11月1日付にて国際布教総監に任命されました。